

ヒト認知系の総合的研究

研究代表者 鈴木 光太郎

1. 分担者

鈴木 光太郎 (代表者)

宮崎 謙 一

工藤 信 雄

福島 治

白井 述

2. 研究活動の概要

絶対音感と相対音感の国際比較、アヴェロン野生児、乳児における運動視・形態視の発達、選択行動における非意識的思考、自己概念の変動性などをテーマに研究を行なった。

今年度は、本プロジェクトの主催で以下の4回の公開講演会を開催した。

- ・2014年5月12日 (中央図書館ライブラリーホール)
「日本人乳幼児におけるオノマトペの理解とその発達」(京都大学大学院文学研究科 池田彩夏)
- ・2014年7月17日 (中央図書館ライブラリーホール)
「成人および乳児における視線知覚の恒常性」(University of New South Wales 大塚由美子)
“What can we learn about visual perception from the hollow face illusion?”
(University of Wollongong Harold Hill)
- ・2014年10月14日 (総合教育研究棟プレゼンルーム)
「『多感覚』『Sensory re-adjustment』の指標としてのベクシオン」(九州大学高等研究院 妹尾武治)
「絵を描く心の基盤を探る」(中央学院大学子ども学部 斎藤亜矢)

・2015年1月6日（総合教育研究棟D301）

「認知・行動・意思決定の無意識的側面」（東京大学先端科学技術研究センター渡邊克巳）

3. 研究成果の概要

宮崎は、絶対音感と相対音感の国際比較のための調査を継続して行ない、日本と中国、ポーランドの音楽大学の学生からデータを収集した。これまでに得られていた結果では、絶対音感保有者の割合は日本と中国では過半数を超えるのに対して、ドイツとアメリカではほとんどゼロに近い一方で、相対音感のテストの成績では、日本の学生が最も成績が低いという顕著な対比が示されていたが、新たに追加されたデータによって、この対比がいっそう明確なものになった。（宮崎謙一）

鈴木は、アヴェロン野生児の最初の観察報告であるボナテールの報告について調査を行なった。また、哲学の問題であるモリヌー問題を実験心理学からとらえ直すことを試みた。（鈴木光太郎）

白井は、視知覚における運動・形態情報処理の発達について、乳児を対象とした実験的研究によって検討した。その結果、少なくとも生後5カ月の乳児でも、運動情報を一切含まず形態情報のみを持つ静止画の呈示によっても、条件次第では運動印象の形成が可能であることが示された。また、断片的に呈示される形態情報を、随伴する運動情報にもとづいて統合、復元する視機能も生後5カ月前後で発現することも見出した。これらの結果は、視覚情報処理における運動・形態情報の統合過程が、ヒトでは生後5カ月前後から機能的になることを示唆する。（白井述）

工藤は、属性の異なる4つのアパートから最適なものを選択する架空の問題を設定し、意識的な熟考に対する非意識的思考の優位性を検討した。その結果、先行研究とは異なり、最適な選択行動における思考条件間での差は見られなかった。干渉課題を挿入するという操作は、必ずしも非意識的な情報処理を保証するものではないのかもしれない。（工藤信雄）

福島は、自己概念を反映する性格特性評定に関して、複数の測定機会を得た

同一特性の評定値の変動の大きさを異なる指標で表し比較した。標準偏差、ファジィ評定法による矛盾度、主成分分析を用いるSCD (self-concept differentiation) の3つの指標のうち、先の2つは比較的関連が高くSCDは他の2つと関連が低かった。SCDは測定項目全体の相関関係から構成されるため、同一特性の変動の測度には含まれるべきでない異なる特性項目間の分散の影響が加わると指摘されてきたが、それが他の変動性指標との関連の低さとなって現れることを確認した。また、SCDのみに社会的望ましさと負の関連が見られ、同一特性の変動性を表す指標として妥当性が低いことを明らかにした。(福島治)

4. 研究成果の一覧

● 学術論文

- ・ 鈴木光太郎 (2014) 「ボナテールのアヴェロンの野生児」. 人文科学研究 (新潟大学人文学部), 第135輯, T1-T30.
- ・ Shirai, N., Imura, T., Tamura, R., & Seno, T. (2014) Stronger vection in junior high school children than in adults. *Frontiers in Psychology: Perception Science*, 5:563, 1-6.
- ・ Imura, T. & Shirai, N. (2014) Early development of dynamic shape perception under slit-viewing conditions. *Perception*, 43, 654-662.
- ・ Shirai, N. & Imura, T. (2014) Implied motion perception from a still image in infancy. *Experimental Brain Research*, 232, 3079-3087.
- ・ Furuhashi, N. & Shirai, N. (2015) The development of gaze behaviors in response to biological motion displays. *Infant Behavior and Development*, 38, 97-106.
- ・ Fukushima, O. & Kobayashi, S. (2014) Narcissistic self-enhancement in Japan: Not better-than-average but biased positively more than others. *Tohoku Psychologica Folia*, 73, 27-35.

● 著書

- ・ 宮崎謙一 (2014) 『絶対音感神話 —— 科学で解き明かすほんとうの姿』. 化学同人.

- ・鈴木光太郎(2015)「形の哲学——心理学から見たモリスー問題」. 座小田豊・栗原隆(編)『生の倫理と世界の論理』東北大学出版会, pp.101-120.
- ・白井述(2014)「乳児期における官能、感性情報処理能力の発達とその評価」. 官能評価活用ノウハウ・感覚の定量化・数値化手法, 技術情報協会, pp. 34-37.
- 学会発表, シンポジウム, 講演
- ・鈴木光太郎(2014)「オオカミ少女はいなかった」. 日本心理学会公開シンポジウム, 東北大学マルチメディアホール、東京大学弥生講堂一条ホール.
- ・鈴木光太郎(2014)「心の進化からみたヒト」. 愛知県立大学多文化共生研究所公開講演, 愛知県立大学.
- ・伊村知子・森柚紀・白井述(2014)「キャストシャドウによる対象の接近・後退運動知覚の発達」. 日本赤ちゃん学会第14回学術集会, 日本女子大学.
- ・Shirai, N. & Imura, T. (2014) Changes in radial optic flow perception precede the development of voluntary locomotion. Symposium 4B: Infant Visual Perception and Beyond: Motion, Color, Object and Face Perception, and Cross-modal Rule Learning (Organizer: Yumiko Otsuka), The 10th Asia-Pacific Conference on Vision (APCV 2014), かがわ国際会議場.
- ・Shirai, N., & Imura, T. (2014) Implied motion perception in infancy. 37th European Conference on Visual Perception, Belgrade, Serbia.
- ・伊村知子・白井述・増田知尋・和田有史(2014)「乳児における運動情報による対象表面の素材質感の知覚」. 日本基礎心理学会第33回大会, 首都大学東京.
- ・白井述・伊村知子(2014)「Implied motion 知覚の初期発達」. 日本基礎心理学会第33回大会, 首都大学東京.
- ・和泉絵里香・伊村知子・白井述(2014)「児童期における線運動錯視知覚」. 日本基礎心理学会第33回大会, 首都大学東京.
- ・白井述(2015)「乳児期におけるimplied motion知覚の発達」. 第10回犬山比較社会認知シンポジウム, 京都大学霊長類研究所.
- ・白井述(2015)「赤ちゃんは本当に有能か?: 運動視と移動行動の発達の関係性から」. 日本発達心理学会大会委員会・日本赤ちゃん学会若手部会共同企画

シンポジウム「赤ちゃん学が発達心理学に期待するもの：発展的融和に向けて」. 日本発達心理学会第26回大会, 東京大学本郷キャンパス.

- ・福島治 (2014) 「自己概念の変動性を表す指標の比較」. 日本社会心理学会第55回大会, 北海道大学.

言語類型論の記述的・理論的研究

研究代表者 高 田 晴 夫

1. プロジェクトメンバー

高 田 晴 夫 (代表者)
三 井 正 孝
藤 石 貴 代
秋 孝 道
土 橋 善 仁
駒 形 千 夏
中 村 隆 志
磯 貝 淳 一
江 畑 冬 生
成 田 圭 市 (協力者・教育学部)
本 間 伸 輔 (協力者・教育学部)
朱 継 征 (協力者・経済学部)
大 竹 芳 夫 (協力者・経済学部)
池 田 英 喜 (協力者・国際センター)

2. プロジェクトの概略 (2014年4月1日～2015年3月31日)

言語類型に関わる基礎研究について、以下の共催者とともに、研究会等で、